

夕焼小焼

木枯らし 一号が例年より 一カ月も早く来襲、そのあとも波状的に晩秋寒波が続いた。先月末の寒波では十月としての初雪や大雪の記録が各地で塗り替えられてしまった。秋を味わい忘れたように、何か季節の進みに追いまくられ、慌ただしく晩秋すぎさっていくような気がする

文化の日は 一統計のうえでは晴れが多い『暦異日』にあたり、小春日和の暖かい日になりやすい。例年ならば十一月の始めは、武蔵野の雑木林ほんの少し色づきはじめ、柿の木には熟しい柿の実が残り夕焼けが一番よく似合う季節なのである。まさに中村雨紅作詞の 夕焼小焼で日が暮れて山のお寺の鐘がなる・・」の世界である。この歌の舞台とされているのが、氏のふるさと高留 たかとめ、いまでも夕焼小焼の里と呼ばれている。東京八王子から陣馬高原にぬける陣馬街道沿いの詩情あふれる山里である。秋の日はつるべ落とし」に暮れて家路に急ぐ子供らを追いかけて

夕暮れがあつという間に迫る。十一月始めは、午後三時から六時までの気温の下がり方が一年を通して最も大きく、夕暮れが迫るにつれて急に冷え込む。都会ではあまり見られなくなったが、この季節、ワラ焼の残り火による煙が夕暮れ時の畑も上に低く覆っている風景に出会うことがある。

ゆらりと立ち登る煙が頭を打ったように薄く広がり、夕焼けに映えて詩情を誘う。陽が西に傾くにつれて地面から熱がどんどん奪われ、地面近くから空気が冷やされ、人の高さするすれかもう少し上に暖かい空気が残り、気温が逆転する層ができてしまう。それが目に見えない空気の蓋となつて煙を抑えてしまうからである。夕焼小焼のお寺は、おそらく石段を何十段も上がった上にあるので気温の逆転層の上となる。山寺の和尚さんは暖かい山の上で鐘をならしていることになる。

ともあれ明後日は暦のうえでもう 立冬、いよいよ冬を身構えねばならない季節がやって来る。七五三のお参りに出かける時には、一枚重ね着をもっていくように

おすすめしたい。 一九九八年 一月八日